

MJIIT 短期留学プログラム報告書

理工学部電気電子生命学科 3年

(プログラム参加時)

鎌田 翔仁

この度、吉岡留学金制度を利用し、**MJIIT**に2月16日から3月30日まで留学をしておりました鎌田翔仁です。昨年、このプログラムに応募した際には参加することがかなわなかったのですが、どうしてもという思いが残り、再び応募させていただきました。そして、この度マレーシアにて短期留学を行う機会を与えていただき、日本国内では得ることのできない貴重な経験をすることができたことを非常に感謝しております。誠にありがとうございました。

本プログラムに応募したのは、私自身がこれまでに一度も日本を出たことがなく、大学を卒業するまでに一度でもいいので、国を問わず日本国外に出てみたかったという思いがあったためです。しかしながら、私の力ではどうしても国外へ行くための資金を満足に用意することができず、出資額の多い留学には応募することができませんでした。また、本短期留学プログラムは春期休暇の期間に設けられているというのが大きな魅力の一つでもありました。長期の休暇では勉強が疎かになり、また新年度に向けて勉強に対する意欲を維持することも困難になりがちです。大学院まで進学して研究を行いたいと考えている身としましては、非常に有益なプログラムでした。

なぜマレーシアを選んだのかに関しては、マレーシアという国は多くの民族が共存している社会であり、同じアジアの国でありながら日本とは全く異なった環境であるということが理由となりました。異文化間でのコミュニケーションがどのようなものであるのか一切考えがなかった自分にとって、多くを学ぶ絶好の機会になると考えられたからです。また、先進国入りを目指すマレーシアの学生、学問がいかなるものであるのかという点もまた、自分にとって魅力の一つでもありました。私は教職課程を履修しているのですが、自分の体感では、先進国といわれる日本でも学校において学問に対する熱意を持つ人が多いとあまり感じる事ができず、果たして他の環境においてはどうなのかということが気にかかっておりました。そのため、上向きの熱意にあふれる学生の様子を見ることができるのであれば、自分にとって大いに刺激になるだろうとも考えておりました。

実際に**MJIIT**に行って、私の専攻したい内容と全く同様のものはなかったのですが、指導教官を担当していただいた**Anthony**先生が尽力してくださり、自分の専攻の内容に極力近いものを学ぶことができるようにしていただきました。正直に申し上げますと、私自身の考えではマレーシアの教育が日本の教育にはるかに劣っているであろうと思っていた面もありましたが、そういったことはなく、むしろ各科目で学ぶことは自分にとって新鮮で刺激的なものになりましたし、日本語では知っている専門用語を改めて英語で説明されると困難であることもわかりました。また友人から、マレーシアでは数学や理科の英語教育を中学校の時点から始めるということを聞き、日本語で数学や理科などを専門的に学ぶことができるというのは国内にいる人間にとってはメリットとなっても、国外で活躍をしたい人には関門になりうるということがわかりました。**MJIIT**には多くの機材や研究用機器があり、学生の要求に合わせて多種の実験をすることが可能であるということが伺えました。学生が実際に機器に触れることで知識の定着を助け、学生の成長をも大いに助けているようでした。

また、ムスタパ大臣の講演会が開催された際には、大臣に対して質問をする機会を与えていただきました。初めての機会に緊張はしましたが、質問の案を考える際に日本とマレーシアについて調査し比較することで、

改めて日本とマレーシアの関係について、そして政治についてなどについてよく考えるととても良い機会となりました。そして、日本に帰った後でも政治などに目を向けることの大事さを意識しております。今までは自分の専門のみを学ばばいいと思っておりましたが、政治と学業や研究などは切っても切り離すことのできない関係にあり、政治の知識はなくても苦勞することはないかもしれませんが、知っていればよりよく生きることができるのではないだろうかということ意識させられました。

マレーシアの実生活では基本的に英語で通用するので、言葉の問題で困ることはあまりありませんでした。海外で生活するのが初めての自分にとって、日本よりは危険であるということ言われ続けていたので、気を抜くことができず、最初はあまり行動をすることができませんでした。しかし、環境への慣れや友人の助けもあり、徐々にどのように行動するべきかを理解することができて、行動を起こすことができるようになりました。普段の生活では、MJIT で同じクラスになった友人や宿泊を行った BATC 内でできた友人と共に、外出を行っておりました。BATC では、放課後や就寝前などの課外の時間などにマレーシアを訪れている様々な国の人と交流することができました。偶然ながら、特に中東からマレーシアを訪れている人からたくさん話を聞くことができたというのが印象的で、ムスリムとしての在り方がマレーシアとは少々異なるという印象を受けました。私の専攻とは異なる学問の話などもできた上、日本から見たマレーシアという国と、日本国外、マレーシア以外の国から見たマレーシアという視点を共有することで新たな知見を得ることができました。こういった異分野での交流もまた、BATC という絶好の場を提供していただいたおかげであると感じております。

そして、普段の生活では問題はなかったのですが、マレーシアを出国する一週間前に体調を崩して熱を出してしまった時、BATC 内の隣人が助けてくれ、無事に一日で治すことができたということもありました。そういったつながりの大切さというものが改めて感じられる機会となりました。その隣人の方はもてなしの心にあふれた方でとても親切だったので、日本に限らずそういった精神というのは非常に大切にされているのだということ改めて意識させられました。

MJIT では教授に限らず日本人の方とお会いする機会も多く、その方々から海外で生活する上での注意や生活していてどう感じるかという話を伺いました。そのおかげで、私の1か月半という短い期間での留学で多くの知識を身に着けることができたと思います。

今回の経験では自分の英語の技量を確かめる機会となりました。私は平生より大学で必修の科目を終えたのち、科学技術英語の勉強を独学で行っておりました。その甲斐あってか、英語での会話などにおいて語彙の不足以外で困ることはさほどありませんでした。それは自分自身の学び方に対する自信にもつながり、今後の勉強にも熱が入る結果となりました。しかし、相手が理解しようと努めて頂けたからこそ通じたということもありましたので、もし私が相手にプレゼンする立場であった場合、理解されないということが起こりかねないとも感じたので、発言に際しての表現や語彙などを増やして、できる限り適切な表現を用いることができるようになりたいと思いました。

また、MJIT では実習に力を入れているという印象が強く、たとえ実習の時間でも事前の座学の時間が多い日本の教育との違いを感じる節もありました。実際的な経験に基づいた知識は座学のみで定着させるということは困難であるという持論を持っている私は、今後日本でも実際に手を動かす機会をより多く持つことをしなければ、無用の長物を抱えることになってしまいかねないという考えを抱きました。

マレーシアでお会いする方々は日本に対して大変良いイメージを持っている方が多く、日本人は素晴らしい、日本製品は素晴らしいと称賛されることがとても多かったです。その一方で、その称賛を聞くたびに自分自身が日本人の代表としてマレーシアにいることを意識させられ、自分自身の立居振舞が日本人として恥ずかしくないかということを考えさせられました。それはたとえ日本にいたとしても忘れてはならないことで、「私は

自分の持っている背景の代表として恥ずかしくないのか」という意識は常に持って生きようと考えました。

今後海外で活躍したいと考えている私にとって、この度の経験は大変貴重なものとなりました。海外へ進出するための自信にも繋がった上に、マレーシアのみならず他国でも活躍する人との繋がりを持つことができました。私が神経科学を専攻とした理由の一つに、人間に興味があったという点があります。人間がどのように思考するのかを知るためには、神経活動のみを見てわかることはなく、その考察には人間というものを知る必要があります、人間を知るということはその活動について知ること、すなわち文化や生活についての見識があることではないかと私は考えています。今回の経験で多くの人と出会い、日本との違いや共通点などを学んだ上で歴史、地理について学ぶことによって人間の発展、変化について理解し、神経科学の研究を深めることができるだろうという新たな見解を持つこともできました。そして、私の感じた自分自身に対する不足を補うべく、精進したいと思います。

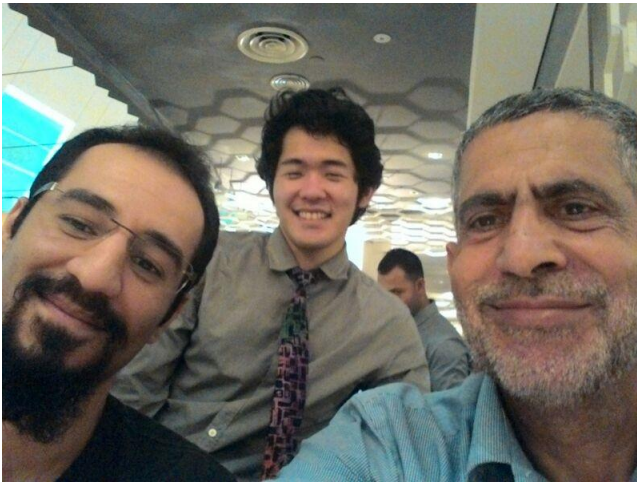
改めてこの度、貴重な機会を与えて頂けたことに感謝いたします。おかげで自分自身でも感じられるほど見識を広げ、成長をすることができたと思います。吉岡会長をはじめ、ご協力してくださった皆様にお礼申し上げます。ありがとうございました。



お世話になった Anthony 夫妻のホームパーティーにて撮った写真です。MJIT の先生方もいらっしゃり、賑やかな会になりました。右の写真は私の握った寿司と MJIT で日本語を教えていらっしゃる吉田先生の作った天ぷらです。Anthony 先生の奥様の Zeinab さんはマレーシア料理をふるまってくださり、マレーシアと日本の食文化交流となりました。



同時期に BATC (MJIT 内の寮) に泊まっていた小島さんにお誘いいただき、小島さんの友人の誕生日パーティに参加させていただきました。小島さんのおかげで友人がたくさん増えて、マレーシアでの生活が充実しました。本格的な中東料理を食べる初めての機会となり、またイラニアンダンスに挑む機会となりました。この後イラン人の友人にダンスに誘われることが多くなりました。



右の写真は右から Masoud さん、私、Shaban さんです。それぞれ違う国からマレーシアに来ていましたが、BATC 内で濃く、長い時間を共に過ごしましたが、BATC でフルーツを食べたり、コーヒーを飲みながら毎晩いろいろな話をしました。Masoud さんは私にコンピュータプログラミングを教えてください、おかげで大いに成長することができました。Shaban さんは私にアラビア語とコミュニケーション論、言語学についてなど、様々なことを教えてくださいました。BATC での交流は、自分にとってたくさんの興味を引き出す刺激的な交流となりました。右の写真のように Shaban さんと私はよく二人で出かけたりしておりました。お互いマレーシアに詳しいわけではないので「冒険しよう、発見しよう」と、二人で笑っていたのを覚えています。



お世話になった Anthony 夫妻と、お別れの際に撮った写真です。お二方ともとても優しい方で、帰国の最終日の最後まで私に付き合ってくださいました。また、マレーシアで過ごす間も私のことを気遣ってください、「君が MJIT で一番学びたいことを学べるようにするよ」と心強いお言葉をいただいております。お二方のおかげでマレーシアでの生活が充実したものになりました。帰る際に「日本に帰っても、望めばいつでも連絡を取ることができるよ」と言われて、いい時代に生まれることができたなと感じました。